

『力への意志』をめぐる構想の変遷について : 『 善悪の彼岸』刊行まで

著者	菅野 孝彦
雑誌名	倫理学
号	11
ページ	25-34
発行年	1994-09-30
その他のタイトル	Der Wandel des Planes in Wille zu Macht bis 1886 Sommer
URL	http://hdl.handle.net/2241/14977

『力への意志』をめぐる構想の変遷について

——『善悪の彼岸』刊行まで——

菅野孝彦

ヤスバースが「新しい哲学の時期」と語り、カール・レーヴィットが「ニーチェ本来の哲学の展開期」と語るように、フリードリッヒ・ニーチェの思想発展において、後期思想——『ツァラトゥストラ』以降——がもつ重要性は、われわれの論をまつことなく首肯されるであろう。そしてニーチェのこの歩みは、同時代人への彼の失望と訣別の歩みにほかならなかった。彼は、一八七八年六月末カール・フックス宛に「以前私は、哲学者を尊崇してきました。しかし『いま彼らへ』多くの熱狂や幸福感は消えてしまいました。……今や、私自身が哲学者になるよりほかありません。」と手紙を書いて、自ら哲学者となる決意を表明した。また『人間的な、あまりに人間的な』第二部の序文において、次のように語っている。『反時代的考察』第三編において、私の最初にして唯一の教師たる、偉大なアルトゥール・ショーペンハウアーに対する畏敬の念を表明したと

き、私自身すでにモラリスト的な懷疑と解体の真只中にあつた。すなわち、一切の従来のペシミズムの批判の中に、同時にその深化の中にいた。つまり私はすでにそのとき、人々の言うようにへもう何もかも、ショーペンハウアーさえも信じていなかった。……一八七六年のバイロイトの勝利の祝典に際して、私がリヒャルト・ヴァーグナーに敬意を表した勝利の祝辞、もつとも強烈な〈現実感〉を帯びたこの作品ですら、奥へ入って見れば、私の一片の過去に対する、私の航路のうちのもつとも美しい、もつとも危険な風の安らかさに対する敬意と感謝の念であり、……事実の一つの訣別であつた。これらは、ニーチェが時代と文化の危機を救い得る師と仰ぎ見た、ショーペンハウアーとヴァーグナーへの痛ましい訣別の告白であり、哲学者ニーチェの告知なのである。しかし、ニーチェにとつて模索のときは続くのであり、『人間的な、あまりに人間的な』『曙光』『悦ばしき知識』といった中期を飾る諸著作は、自らの哲学に

至る混沌の所産と言えよう。

ニーチェ自身が自らの哲学の発進を語る言葉を、以下の手紙の中にも見ることができる。まず、一八八四年三月八日付けフランツ・オーヴァベック宛の手紙である。「私が何を背負っているかを、私自身を持ちこたえるためにどんな強さを必要としているかを、誰が知るでありましょう。どうすればこれを、為し得るか、私にはわかりません。しかし私に初めて、人類の歴史を真二つにわる思想が到来した可能性があります。この『ツアラトゥストラ』は一つの序文、入口でしかありません。至る所から元気を失わせるものばかりがやって来たので、私はあの思想に耐えるために自分を勇気づけねばなりませんでした。というの私はまだあの思想を口に出したり、叙述したりするには程遠いのです。あれが真であれば、あるいはむしろ真であると信じられるならば、一切の従来の価値が奪われてしまいます⁽⁹⁵⁾」また、同じくオーヴァベックに四月七日付で次のように書いている。「今私は、一歩一歩着実に多くの分野を通り抜けねばなりません。というの私は、『ツアラトゥストラ』によってその入口を作った、私の『哲学』を完成させるために、今後の五年間を用いようと決心したからです⁽⁹⁶⁾」これらの文面にわれわれは、『ツアラトゥストラ』を入口（Vorhalle）とし、いわば母屋（Haupthaus）である『私の『哲学』』を打ち立てようとするニーチェの、並々ならぬ決意を読み取ることができよう。

以上のようなニーチェの言葉が物語るように、『ツアラトゥストラ』以降の後期思想が彼の思惟において占める位置は重要

である⁽⁹⁷⁾。それゆえ、彼の思惟の特質を語ろうとするならば、後期思想を説明することは、われわれにとつて不可欠な課題となる。しかしながら、この課題を遂行するにあたってわれわれは、周知の問題に直面せざるを得ない。すなわち、ニーチェの後期思想における『力への意志』の存在をどのように捉えるのか、という問題である。つまり、グロースオクターフ全集に著作として所収されている『力への意志』をニーチェの後期思想を説明する際に用いる一連のテキスト群の一つとして数え入れるのか、あるいは、もしこの著作を不十分であるとするならば、一体いかなる点が不十分であるのかを明らかにしなければならぬ、という問題である。そこで以下本稿では、ニーチェの『力への意志』構想の変遷を、『力への意志』を主著とみなすグロースオクターフ版と、『力への意志』を主著とみなないグロースオクターフ版と比較し、検討する。

『力への意志』を主著とするグロースオクターフ版全集は、ニーチェ自身によつてではなく、彼の妹であるエリザベートと助手をつとめていたペーター・ガストによつて編集されたが、その構成は、次のようになる。

「力への意志」

あらゆる価値の価値転換の試み

第一書 ヨーロッパのニヒリズム

第二書 これまでの最高価値の批判

第三書 新しい価値定立の原理

第四書 訓育と育成¹

しかし、グロースオクターフ版『力への意志』と異なる構想をもつ、ニーチェ自身が構想していた著作としての『力への意志』に関するさまざまなプランを彼の遺稿中にみることができ²る。以下、それらの諸プランを整理することによって、ニーチェ自身が刊行を企図した『力への意志』とグロースオクターフ版『力への意志』との関連について考究する。またそれは、『力への意志』とは異なるさまざまな構想についてもふれていくことを意味している。

ニーチェが『力への意志』刊行の計画を初めて公にしたのは、『善悪の彼岸』の表紙カヴァー（一八八六年八月）³においてであり、その後は『道徳の系譜』の第三論文「禁欲主義的理想は何を意味するか」第二七節において、準備中の著作として紹介しているだけである⁴。したがって、この『道徳の系譜』が出版された一八八七年十一月の時点においてまでは、ニーチェは自ら『力への意志』刊行の意図をもっていたことは、明白な事実となる。ニーチェが『力への意志』の刊行を公にしたこれらの時期を区切りとして、『力への意志』に関する諸プランを整理してみよう。

『善悪の彼岸』刊行以前における主著構想の変遷

『力への意志』に関するニーチェの言及が初めてみられるのは、「一八八五年八月から九月」のアフォリズム38[1](III)にお

いてである。

「力への意志

あらゆる生起についての新しい解釈の試み

フリードリッヒ・ニーチェ著

この『力への意志』の構想は、次の40[2](III)のアフォリズムにもみられる。

「力への意志

すべての出来事についての新しい解釈の試み

（われわれを脅かす〈無意味さ〉についての序言。ペシミズムの問題。）論理学。物理学。道徳。芸術。政治学。⁵

しかし、この時期にみられる諸プランの構想は、『力への意志』に限定されるものではなかった。むしろ、著作の表題として構想されている点では、「永遠回帰」思想にかかわる構想が数多くみられる。「永遠回帰」が著作の表題として初めて現われるのは、一八八四年春の25[1](III)においてである。

「永遠回帰

一つの予言

フリードリッヒ・ニーチェ著

第一章 時は来た

「永遠回帰」の表題をもつ著作の構想は、三部からなることが考えられている。25[6](III)では、「一つの予言」という副題をもち、25[33](III)では「正午と永遠」という副題のもとで、それぞれ〈時は来た〉〈大いなる正午〉〈誓約者〉の三部からなることとされる。この「永遠回帰」の構想の中で、後に『力への意

志」の副題となる「あらゆる価値の価値転換の試み」が、すでにこの時期において26[259](Ⅲ)におけるように副題として考えられていることは、注目される。またこの時期には、「永遠回帰」の哲学の準備と位置づけられた「新しい啓蒙」という構想26[293](Ⅳ)

「新しい啓蒙」

〈永遠回帰の哲学〉への一つの準備」

が、新しい著作の表題として構想されてもいた。

例えば、27[79](Ⅳ)では、これがさらに詳述されている。

「新しい啓蒙」

1 根本的誤謬の暴露（それらの背後には、人間の臆病と怠惰と虚栄心が隠れている） 例えば、感情（と肉体）に関して 純粹に精神的な者の錯誤 因果律 意志の自由 悪 人間の中の動物 調教としての道徳性 行為をへ動機から見る誤解 形態化する衝動のしくじりとしての神及び彼岸

〈純粹な認識〉〈真理衝動〉 〈天才〉 総合的感情

罪深さに代わって、人間の一般的不出來

2 第二段階 創造的衝動の発見、それが隠れたり退化している場合でも

〈われわれの理想は、理想そのものではない〉テーヌ英文学史三卷四二頁

ヘーゲルⅡ精神—ショーペンハウアーⅡ意志

隠れた芸術家 変形する力としての宗教、立法家、政治家。

前提。創造的不満 足、焦燥—人間を形成し続ける代わりに、彼らは過去の偉大さから神々と英雄を造る

3 人間の克服

宗教の新しい解釈

敬虔な人への私の共感—それは一級のものである。自己自身への彼らの不満

人間克服の段階としての自己Ⅱ克服」

この時期のニーチェが関心をもっている事柄が明らかになっている。一言でいえば、既存の諸価値—道徳、科学（因果律、真理）、宗教—へのニーチェの批判が語られているといえよう。それはまた、問題の所在を明示し、批判し、克服を企図する思想展開の構図を示している。

さらに、この時期に特徴的な構想は、「正午と永遠」のテーマである。このテーマでニーチェは、五部からなる著作を構想している。

34[78](Ⅳ)では、

「正午と永遠

1 〈真理〉と〈非真理〉への自由

2 〈善〉と〈悪〉への自由

3 〈美〉と〈醜〉への自由

4 比較的強い人間としてのまじな人間、それとこれまでの試み。〈ちようどよい時〉

5 鉄槌—人間がそれによって粉々になる危険」

といった五部構成である。また34[91](Ⅳ)では、

「正午と永遠」

永遠回帰の哲学

フリードリッヒ・ニーチェ著

序言 人間の位階秩序について

第一部 知識と良心

第二部 善悪の彼岸

第三部 隠れた芸術家

第四部 高度な政治

第五部 鉄槌（あるいはディオニソス）

と構成されている。これらの構想は、一八八五年四月から六月に書かれており、ちょうど『ツァラトゥストラ』を脱稿した時期（一八八五年二月）に続いていることは興味深いといえる¹⁾。というのも、「正午と永遠」というテーマは、『ツァラトゥストラ』の重要な主題であったが、そればかりでなく、構想が描かれたこの時期から考えても、これらの構想が『ツァラトゥストラ』の続編として考えられていたと思われるからである。

マッツィノ・モンティナリイは、「永遠回帰の哲学の序文として、再び別のタイトル（新しい啓蒙、善悪の彼岸）が呈示される。序文が副題になり、新しい題を得るまで、正午と永遠、永遠回帰の哲学、あらゆる価値の価値転換については、ニーチェの著作の中ではもはや何も語られない。」と述べ、さまざまな主題の錯綜性、ひるがえつてはニーチェにおける構想の豊穡性について指摘する¹²⁾。

こうした『ツァラトゥストラ』の圏域の中でなされた構想

——「永遠回帰」「新しい啓蒙」「正午と永遠」——は、『善悪の彼岸』の出版にいたる一八八五年秋から八六年秋にかけて頻繁にみられる。

2[75](III)では

「永遠回帰。新しき祝祭と予言の書

永遠回帰。聖なる舞踏と誓約

正午と永遠。聖なる舞踏と誓約

2[129](VII)では

「永遠回帰

ツァラトゥストラの舞踏と行進

第一部 死んだ神の追悼会

フリードリッヒ・ニーチェ著

1 死んだ神の追悼会

2 大いなる正午に

3 へこの鉄槌にふさわしい手はどこにあるのか

4 われら神を無みする者」

と、構想が表わされている。こうした構想が、『ツァラトゥストラ』を自らの哲学の「入口」とし、それを土台として主要部分を打ち立てようとするニーチェの意図——『ツァラトゥストラ』の圏域における後期思想の展開——にはかならないことは、明らかであろう。彼は、一八八四年六月マイゼンブルク宛にそのことを語っている。

「私が何をしたかを、その真の深みで感受するような若千の人間が出現してくるのは、いく世代の後になるのか、誰

にもわからない。またそのときになっても、どんな不法なこと、まったく不適当なことが、私の權威を握り所に主張されるかと考えると、恐怖を覚えます。しかし、これは偉大な人類の師たる者の苦悩なのです。彼は、自分が時と場合によつては人類の呪いにもなり、また祝福にもなり得ることを心得ています。ところで私自身は少なくとも、余りにもひどい誤解にたいしては、これを押し進めないように、全力を尽くすつもりです。いまこの私の哲学の人口のホールを建築したのちは、倦むことなく再び手をくだして主要部分を完成させたい。⁹³

しかしながら、このようなニーチェの意図にもかかわらず、彼の哲学の「主要部分」の完成はなかなか進捗しなかった。その困難さを、一八八五年七月二日オーヴァベック宛の書簡に披瀝している。

「私の哲学、もし存在の根源までわけいつて虐待するものを、哲学と呼ぶことができるなら、それはもはや伝達することのできないもの、少なくとも印刷では伝えられないものです。ときどき私は君やヤーコブ・ブルクハルトと秘かな会談を持ちたいとあこがれます。それは、二人に新しいニュースを物語るよりも、この危機をどう乗り切るかを尋ねたいからです。現代は無限に輕薄です。私は、自分が多くのことをすでに大衆的に語ったことを恥じています。それはいかなる時代にも、今より価値があり、深みのあった時代でも、《大衆》によつて聞かれるべきではなかったの

です。われわれは、まさに《出版並びに厚顔無恥の自由》の世紀のさなかで趣味をぶち壊しているのです。私の人生は、今は次のような願望にかかっています。すなわち、いっさいの事物が、私がそれらを理解するのとは違つたふうにあつてもらいたいということ、そしてまた誰かによつて私の《諸々の真理》が、信じられないものにされてしまへばいいということです。⁹⁴

ここでニーチェは、自らの哲学を語ろうとする強い矜持を持つとともに自らの哲学が人々に対して「伝達不可能ではないか」という危惧の念にとらわれている。そこではまた、ダンテやスピノザらの先駆者以上に、自らの置かれた境遇が困難なものであることが述べられている。自信をもつて出版した『ツァラトゥストラ』も好評を博すことなく、第四部にいたつては五十部にも満たない自費出版とならざるを得なかったが、そうした人々の無理解の渦中においても、いまだ自己の矜持をもつて生きねばならないとするニーチェの心象が語られているのである。

さて、『力への意志』以外のこの時期の構想を俯瞰するうえで、一八八六年春と日付が打たれている『(三)』の断片は、注目に値する。そこには、「十冊の新しい著作の標題（一八八六年）」と題され、新しく構想された十冊の著作名があげられている。その十冊は、『古代ギリシア人について思うこと』『力への意志 新しき世界Ⅱ 解釈の試み』『芸術家たち ある心理学者の底意』『われら神を無みする者』『正午と永遠』『善悪の彼岸 未来の哲学の序曲』『悦ばしき知識 プリンツ・フォーゲルフライの

歌』『音楽』『ある律法学者の経験』『現在の陰鬱の歴史』である。これら十冊中、われわれが公刊された著作として知るのは、『善悪の彼岸 未来の哲学の序曲』と『悦ばしき知識 プリンツ・フォーゲルフライの歌』の二書である。(なお、『悦ばしき知識』はすでに一八八二年に刊行されており、ここで構想された『悦ばしき知識』は、一八八七年に新たに出版された新版、すなわち第五書『われら恐れを知らぬ者』及び付録『プリンツ・フォーゲルフライの歌』をさしていると思われる)。たしかに、この構想されていた二著作は、必ずしも公刊された著作と同一の内容をもつとは限らないのであるが、ニーチェの諸著作がなんらかのプランのもとに著わされていたことを示すには十分であろうと思われる。その意味で、ここ示されている『力への意志 新しき世界』解釈の試み』もまた、実際ニーチェ自身の著作計画の中にあつたといえよう。

『力への意志』の萌芽とした先の断片(39)(40)及び(41)(42)は、グロイター版第七部「一八八五年八月から九月」の断片にみられるが、そのほかに『力への意志』に関する構想を第七部においてみることはできない¹⁶。また第八部における「一八八五年秋から八六年春」の断片(35)(36)に、初めての『力への意志』の構想と同じ書きつけをみることができる。2[74](36)には、四部から構成された『力への意志』の構想が現われている。

「力への意志」

1 階層序列の生理学

- 2 大いなる正午
- 3 訓育と飼育
- 4 永遠回帰

グロースオクターフ版『力への意志』においてもそうであるが、ニーチェは原則的に『力への意志』を常に四部構成で構想しようとしている。これ以後、『力への意志』の構想が続くのであるが、この2[74](36)断片は『善悪の彼岸』が公刊された時期のものと思われる。というのも、次に『力への意志』の構想が語られている2[100](36)には、「一八八六年夏」という日付がつけられているからである。こうしたことから、『善悪の彼岸』を刊行するこの時期が、ニーチェの後期思想を考究するうえでひとつの転機といえることができる。そして、それはまた『ツァラトゥストラ』の延長線上から離れ、いまだ不分明であるにしても『力への意志』へと向かおうとするニーチェの思想的転機ともいえるのである。

註

本稿で用いるニーチェのテキストは、Nietzsche Werke Kritische Gesamtausgabe, hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Berlin 1967 ff.である。引用箇所は、Abteilung Ⅱ Band をそれぞれローマ数字とアラビア数字で表し、その後に頁数を示す。なお引用文中の強調文字は、原文におけるゲシュペルト

の部分を示している。「」は、引用者の補足である。

- (1) K. Jaspers, Nietzsche, Berlin 1981, S. 43.
- (2) K. Lowith, Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen, Stuttgart 1956, S. 26.
- (3) Friedrich Nietzsche Semiotische Briefe Kritische Studienausgabe (以下 KSB と略記) Bd. 5, S. 335.
- (4) W₃, S. 4.
- (5) KSB Bd. 6 S. 484 f.
- (6) KSB Bd. 6 S. 496.
- (7) たしかに、ニーチェの思想発展における後期思想の重要性を指摘する視点と異なった見解もみられる。たとえば、カール・シュレヒタは、『人間的な、あまりに人間的な』等の著作からなる中期に、ニーチェの中心思想の展開を見てい⁹。(K. Schlechta, Der Fall Nietzsche, München 1959, S. 15 f.)
- (8) 『善悪の彼岸』が出版されたことを、一八八七年八月五日付けの書簡でオーヴァベックに、次のように伝えている。「遠くてとても手の届きそうもなかった成果が達せられました。というのは、新しい本がいま完成したところです。……私の『ツァラトゥストラ』が難解な書であるのは、それが専ら他人に通じない私の体験にさかのぼっているからなのです。君に私の孤独の感情がわかってもらえればいいのだが。生者の中にも死者の中にも私にはこれは血縁だと思われるような人がいません。これはたとえようもなく

恐ろしいことです。ただ子供時代からこうした感情に耐える訓練を重ね、この感情が徐々に発展してくれたおかげで、自分が未だに破滅にいたらぬことが理解されるのです。——私を生き続けさせてくれるところの使命は、今ははつきりと私の目に見えてきました——たとえようもない悲哀の事実としてですが、かつてこの（死すべきもの（人間）の使命に偉大さが備わっていたとすれば、かかるものの中にこそ偉大さがあるのだという意識が、これに光明を与えます。」このようにニーチェは、『ツァラトゥストラ』が世間に受け入れられなかったことに苦しむとともに、それにもまして自らの哲学を語ろうとする気概を示している。ニーチェは、自らの内奥へと沈潜し、その深みに確固とした基盤を見出すのである。

(9) そこで、「近代精神の珍妙さ、複雑さについては、別の機会に私はもっと厳密に論ずるつもりである（ヨーロッパのニヒリズムの歴史」と題してである。これについては、私の準備中の著作『力への意志——あらゆる価値の価値転換の試み』を紹介する。Morgenroete, VI₂, S. 426 f.）、近代精神批判という主題においてニヒリズムの問題が問われることが、ニーチェによって予告されている。ここには、グロースオクターフ版『力への意志』と同様に、『あらゆる価値の価値転換の試み』が、副題としてかけられていることに注目したい。

(10) 著作としての『力への意志』の構想ではなく、概念として

の「力への意志」思想が現われるのは、一八八二年十一月から一八八三年二月の断片5[1][Ⅲ]においてである。「1生への意志? そのかわりに私が見出したのは、常に力への意志のみであった。」とある。さらに公刊された著作に初めて現われるのは、一八八三年夏の『ツァラトゥストラ』第一部「自己超克について」の章においてである。「君ら最高の賢者たちよ、それ「一切の存在者を思考可能なものにしよとする意志」が、力への意志として君たちの全意志なのだ。そして、君たちが善と悪について話すときにもそのようなのだ。」Also sprach Zarathustra. VI, S. 142.

(11) ニーチェは、自らの関心が『ツァラトゥストラ』の延長上にあることを一八八五年二月十四日ガスト宛の書簡で明らかにしている。「こだけの話ですが、この冬の『成果』として若干新しいものがあります。しかし、私には出版者がいないし、何よりも新しいものを印刷してみたい興味がどこにもない。私の『ツァラトゥストラ』のようなものを、必要もないのに出版するという恐ろしく馬鹿げたことは、当然、それにふさわしい馬鹿げた報いを受けることになりました。『正午と永遠 フリードリッヒ・ニーチェ著 第一部ツァラトゥストラの試練』しかし多分印刷不能に終わるでしょう。道化師のむら気から生じた神への冒瀆。」この書簡においてニーチェは、明らかに、『ツァラトゥストラ』の続編として『正午と永遠』の構想を位置づけていることがわかる。

(12) Mazzino Montinari: Nietzsches Nachlass von 1885 bis 1888 oder Textkritik und Wille zur Macht. "Nietzsche" herg. v. Joerg Salagarda, Darmstadt 1980, S. 326.

(13) Friedrich Nietzsche: Semtliche Werke Kritische Studienausgabe Bd. 15 S. 140.

(14) KSB Bd. 7 S. 62f.

(15) 一八八五年九月二日、ガストに宛てて人々の自分に対する無理解を「私は『人間的な、あまりに人間的な』の新版のための準備をしました。それ以外に『世に問う』ものはもう何一つありません。今や私は、世間に通用しなくなっているのです。——長い沈黙。もはや新しい人間は出現しません。古い代物を、必要があればより早く、精緻に、完璧にするつもりです。」と、嘆いている。ニーチェは、こういった心境のもとで一八八六年から八七年にかけての既刊諸著作への補筆を行なっていたのである。

(16) しかし、第七部門の四五の断片群においても、著作としての「力への意志」の構想とはいえないが、思想としての「力への意志」についてふれている個所が以下のようにみられる。40[50][Ⅲ]「力への意志」というきわめて危険な表題のもとで、語ろうとしているのは、一つの新しい哲学、もつとはつきりいえば、あらゆる生起の新しい解釈の試みである。40[61][Ⅲ]「……われわれの衝動は、力への意志に還元される。力への意志は、われわれが降りて行ける最後の事実である。……」43[1][Ⅲ]「……『真理への意志』

はへ力への意志」に奉仕するために発動される……」48[2]
(三)「二つの過程、すなわち放散と凝縮の過程を力への意志の作用とみなすこと。最も小さな断片にいたるまで力への意志には、自己を凝縮しようとする意志がみなぎっている。」

(かんの・たかひこ 筑波大学哲学・思想学系 助手)